

〜天保の飢饉と曾根村〜

昨年曾根町の入江悦郎氏宅で『天保中狼藉並飢饉録』という貴重な記録を見つけました。筆者は入江清兵衛で塩業を営む富商であり、樵風と号する俳人でもありました。

天保四年（一八三三）九月十二日、滝野辺で起きた百姓一揆は加古川筋の村々を襲い、次第に川沿いに南下していきました。翌日、曾根はいつもと変わらない平穏のうちに天満宮の宵宮を迎えました。

祭の酒宴では、誰言うとなくこの一揆のことが話題に登場しました。家財道具を片づけたらと勧められた清兵衛は、使いの者を遣わし、神吉村辺の一揆の様子を探らせます。彼はこの一揆を「乱妨狼藉前代未聞」と書いています。

さて、一揆こそ免れますが、今度はその引き金となった米価高騰の波が曾根を襲いました。この頃から米価は高騰し続け、十二月には一石銀一五〇匁にもなりました。この時代、曾根村には一橋・池田（栗賀）の二人の領主がいました。

栗賀領ではいち早く貸米という救民策がとられますが、一橋領ではご沙汰なく、領民たちは栗賀領に付きたいと騒ぎだす始末で、彼は自分の困米を放出したり、施粥などで彼らを救っています。

天保七年（一八三六）の凶作に伴う飢饉は一五〇人の餓死者を出すほど悲惨なものでした。この時も庄屋や富商らと協力して、翌年四月まで粥切手を発行したり、米安売場を設けるなどの救援活動に打ち込みました。

（専門員 山本徹也）



▶ 天保中狼藉並飢饉録